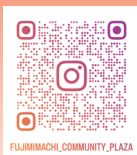




コミ・プラ
マスコットキャラクター
『ホッホ君』



公民館
Instagram

ふじみ町 公民館報

〒399-0211

長野県諏訪郡富士見町富士見 3597-1

コミュニティ・プラザ内 富士見町公民館

Eメール: kouminkan@town.fujimi.lg.jp

No.746

令和8年5月1日

発行 富士見町公民館
編集 公民館報編集委員会

TEL 0266(62)7900

FAX 0266(62)7611

設立当初の 富士見高原教会会堂兼保育園園舎



第2代園長・古清水充（左）と初代園長・古清水万太郎（右）

高原晴雨

「いま、私にできることは」

山林火災の発生が度々報道されていた頃、「ハチドリ」のひとしずくいま、私にできること（光文社）という本を思い出した。南米アンデス地方の先住民に伝わる話を広げようと文化人類学者・環境運動家の辻信一さんが監修したもので、2005年に初版発行された。

ハチドリは、カナダから中南米にかけて棲息する、体長10センチ前後の小さな鳥で、「飛ぶ宝石」と呼ばれるように、玉虫色の身体は光の当たる角度や明るさによって様々な色に変化する。ハチのように空中で静止して花の蜜を吸うときに「ブーン」という音をたてることから、英名は「ハミングバード」という。

「森が燃え、動物たちがわれ先に逃げていく。ハチドリのカリキンディだけは行ったり来たりして、くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んで火の上に落とすとしていく。他の動物たちに笑われながらも、カリキンディは『私は、私にできることをしているだけ』と答える」という話。たったこれだけの短い物語だが、いろいろな事を考えさせられる。確かにカリキンディは小さいけれど、大きな勇気を持っている。逃げ出した他の動物たちは、何もしない意気地無しだったのか。その後、森はどうなったのか。カリキンディに続き、動き出した仲間はいなかったのか。

「燃える森」は、地球温暖化、戦争、飢餓、貧困……。今、世界に起きている様々な問題を象徴しているようだ。一人の人間にできることはほんのわずかな事かもしれない。けれども、知ること、考えること、声を上げること、行動を起こすことは、とても大切なことだ。なかなか難しいことではあるが、一人一人が、「自分にできること」を見つけ、どんな些細なことでも積み重ねていければ、世界はよりよい方向に向かうのではないだろうか。

山口 美佐子

富士見町立保育園 地域が育てた保育の歴史

富士見町には現在、富士見・本郷・落合・境・西山の五つの町立保育園があります。それぞれの園がどのような経緯で生まれ、地域と共に歩んできたのか。また、時代を超えて「子育て」に何が求められてきたのか。保育園が町に誕生した昭和二十五年から令和の今日まで、行政よりも先に動いた地域の有志たちの声と、現在の保護者たちの実感を追ってみました。

第一章 富士見町に保育園 が生まれるまで

① 戦後、地域から生まれた保育の芽

富士見町立保育園のはじまりは、戦後間もない昭和二十五年（一九五〇年）にさかのぼります。この年の五月十五日、富士見区福祉協会によって「私立富士見保育園」が開園しました。中心にいたのは、当時富士見高原教会の教会役員でもあった区会議員で、「富士見村には保育施設がない」という現実



富士見保育園の運動会（1963年 神澤和夫さん 撮影）

向き合い、婦人会・区議・PTAに呼びかけて保育の場を生み出しました。

園舎は富士見高原教会の施設を無償で借り受け、教会の関係者が保母を務めながら運営されました。この時期、社会運動家・賀川豊彦からの多額の援助金も届いています。宗教教育は一切行わず、地域の子どもすべてを受け入れる公共的な場として出発したのです。

開園当初の園児はおよそ七〇名。昭和三十年には第二園舎も建設され、同年の町制施行を経て、昭和四十一年に正式に町へ移管されました。地域の有志が手づくりで育てたこの保育園は、富士見の保育事業のさきがけとして、今も人々の記憶に刻まれています。

② 農村の切実な声から生まれた園

昭和三十年代に入ると、農村部での保育園設立の動きが各地区で相次ぎます。その背景には、農繁期に子どもを預ける場所がないという農家の切実な現実がありました。

なかでも印象的なのが神戸保育園の誕生です。昭和二十八年の大凶作により収入が激減した御射山神戸区では、県の救農土木事業に区民が従事することになり、その際「子どもを預けられる場所がほしい」という声が高まりました。区民自らが旧御射山分校の跡地に園舎を新築し、昭和三十二年に町へ移管。地域の力で保育園をつくりあげた例です。

西久保保育園も同様です。木の間・若宮両区の住民が「農村は人手不足で家では保育が十分にできない」と声をあげ、町への陳情を重ねた末に昭和三十五年に開園しました。施設費の一部は地域住民が負担し、建設には労力奉仕も行われました。

境保育園は区長会での議論が発端となり、昭和三十四年に地域の手で開園。翌々年に町立に移管されました。

葛木保育園は落合小学校葛木分校の廃止に伴い、跡地に昭和三十八年に開園しました。

落合保育園は昭和三十一年に落合小学校の一部教室を借りて開園したものの、国の基準に満たず、実に六年間に

わたって無認可のまま運営を続けるという苦労のスタートでした。

③ 統廃合・新築・そして五園体制へ

高度経済成長期を経て、少子化・核家族化の波が富士見町にも押し寄せます。葛木保育園は昭和四十一年に廃止され落合保育園に統合。昭和五十年代には桜ヶ丘団地の入居増で本郷保育園が増築を重ねるなど、各園は時代の変化に対応し続けました。

平成十年、町は「富士見町立保育園施設整備調査研究委員会」を設置し、四園体制が望ましいとする方向を打ち

園名	発足年	経緯の特徴
富士見保育園	昭和25年	富士見区福祉協会＋キリスト教教会が設立→昭和41年町立に
本郷保育園	昭和29年	旧本郷村立として認可、小学校校舎を間借り
神戸保育園	昭和32年	大凶作を機に区民が自力で建設→町に移管 →西山に統合
落合保育園	昭和31年	6年間無認可のまま運営→昭和37年認可
西久保保育園	昭和35年	農村の人手不足を訴えた住民陳情から →西山に統合
境保育園	昭和36年	区長会発議→小学校空き教室から出発
葛木保育園	昭和38年	落合小学校葛木分校跡地に開園→昭和48年落合に統合
西山保育園	平成14年	神戸保育園＋西久保保育園を統合再編

出典：富士見町史 下巻・富士見町こども計画（令和7年）をもとに作成

出しました。これを受け、神戸保育園と西久保育園を統合する形で、平成十四年四月に西山保育園が開園。その後の検討や地域事情を踏まえ、現在の五園体制が整いました。

富士見保育園は平成三年に中央公民館敷地へ新築移転し、平成五年からは長時間保育、七年からは早朝保育も開始。現在では未満児保育や外国籍の幼児の受け入れも始まり、保育の内容は大きく広がっていきました。

昭和二十五年の牧師館での小さな出発から、七十余年。地域の声が積み重なってできた五つの保育園は今も、富士見の子どもたちの日常を支えています。

第二章 保護者は保育環境に何を求めてきたか

① 富士見で育てることへの信頼

令和六年（二〇二四年）に実施された富士見町の調査では、就学前児童を持つ保護者の七二・七％が子育て環境に「満足」と回答しており、前回調査（平成三十年）とほぼ同水準を保っています。

満足の理由として最も多く挙げられたのは「自然が豊かだから」（八二・二％）と「補助金等の経済的支援が充実しているから」（八〇・八％）。富士見を選ん

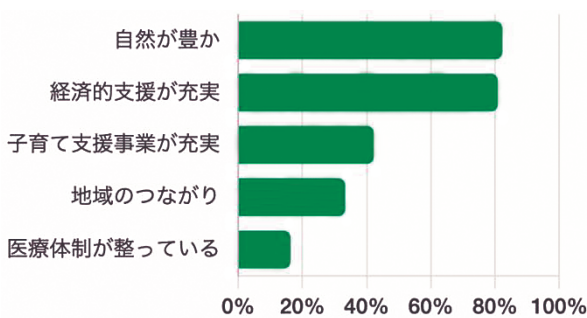
で暮らす保護者たちの、この土地への積極的な信頼が数字に表れています。

② 共働きの切実な声

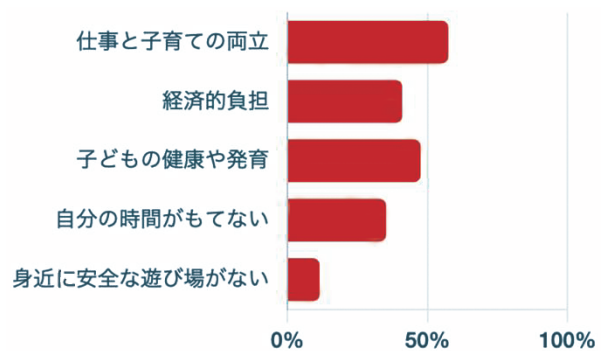
一方、子育ての悩みや不安として最も多かったのは「仕事と子育ての両立」（五七・四％）、次いで「子どもの健康や発育」（四七・五％）、「子育てにかかる経済的負担」（四一・〇％）と続きます。母親のフルタイム就労率は年々上昇しており、「誰かに預けたい」というニーズは確実に高まっています。

子育て環境向上のために最も重要なこととして「保育園の充実」を挙げた保護者は二三・〇％と最多で、延長保育の時間延長や施設の老朽化改善、連絡ツールのオンライン化など、具体的な声も多く寄せられています。

満足している理由（複数回答）
R6 富士見町「子ども・子育て支援に関する調査」



子育ての悩み・不安（複数回答）
R6 富士見町「子ども・子育て支援に関する調査」



③ 変わらない願い

求める環境の中身は、時代と共に変化がありました。農繁期に子どもを預ける場所を切実に求めた昭和の保護者たちと、共働きが一般化し、仕事と子育ての両立に悩みながらも「自然の中で育てたい」と富士見町を選んだ令和の保護者たちとは、置かれた状況が大きく異なっています。

それでも、調査の数字の奥には共通するものが見えます。富士見町で子育てをする保護者の七割以上が満足と答え、その理由の筆頭に「自然が豊かだから」を挙げています。この感覚は、数十年前に区民が労力奉仕で園舎を建てたり、無認可のまま六年間保育を続けた人々の思いと、根っこでつ

ながっているように思えます。この土地で子どもを育てることへの、静かな誇りと信頼です。

あとがき

少子化が進み、移住者も増えるなかで、富士見町の保育園が担う役割はますます広がっています。今回この記事を書くにあたって、住んでいるだけでは深く知ることのなかった町の保育の歴史を調べました。地域の声がひとつひとつ積み重なって今の五つの園が生まれたことを知り、あらためてこの町の底力を感じました。

地域全体で子どもを育てるといふ富士見町の文化は、昭和二十五年の小さな出発から脈々と受け継がれてきたものだと感じます。保育園がこれからも、子どもたちの笑顔を支え続ける場所であることを願っています。

揚妻のほら

「取材協力」 日本基督教団 富士見高原教会
井上創牧師・中山正一さん
中山優さん・神澤和夫さん
「参考資料」
『富士見町史 下巻』（平成3年 長野県諏訪郡富士見町編）
『恵みの高峰 創立75周年記念特別号』（令和六年 日本基督教団 富士見高原教会）
『富士見町高原の子どもたち すこやかに育つために』（昭和58年 富士見町青年健全育成手引書作成委員会）
富士見町こども計画（令和7年3月）
総理府広報室「家庭教育に関する世論調査」（昭和55年）